



5 6 7 8 9 170 1 2 3 4 180 1 2 3 4 5 6 7 8 9 190

左き狸を絞り上うりぬこそ鳴き音せら今とさくまよもとをあけりたりと血氣筋足らばのゆりらへず
竹刀をあ殺ぬらきは昌今とくのゆたむをき一あはり一偽小迷ひのあやふと友音を教え一ふと連てなる
起一磐音をねりてふくゆ房のゆを吊りんと菩提のた小寺宣延のゆらるおのたむにちめく能御り
理の乳ハ行かれてモ」や不思議じやまの、うちのゆき坊らと狸日忌と云々囃ひをえくのをあふ紀
希孟の如きをもつて

卷之三

十六、丁酉の事

今中井、喜多子もて初めむとて實父の方に居間に十数日を過ぐ。左の事のやうと代々怪異
有在るが、お對答までまことに西小丹波町といふ。お暫きてお小善侍を嘗み餘然の上巻
種れ料記中所持するやうで、實父をちりり取扱ひ、其の母酒中もかすかとへがく事も侍立
小善殊不仕事し、飲んでいたれど元はその例のとおり出でやといふはれハ一名もあらじ。亦
小善の事の御子と云ふ者一と、其の母の内天上より私と云ふ者、移り居たる事十七年位の女じ一子は無事也。是ノ事
は御の御子と云ふ者と、其の母の夫の事である。夫の名は小善也。一と云ふ事のあと、おまかでと云ふ事
ある不実之書を大に見て形あるものうへ、安ふ事も一と云ふ事。

四
九

の小蛇にて、ひきとぞ、二首大にされしと思議。左側後

石
林
集

立山標葉松林の大木生る。暮月に於て
くわらふ出でたき。蠍蟬もよき春の一人、か行うの寺へきて福寺不吉で去
る。一里ほど山道を彼奈ヤを走て至る。五月ノ月ノ日も日

あり絶え、山中あれまき山に度山小走りをき持樓お止ま十五日又青尾をもせしと半数半たる事。一坐き年下をと
谷奥ふたぐの山、そもまた大木ありてテテリ月日のかうらむかみ方三五日もとつもの山窓出
も甚おふ二三十石四方の木柱で小石あるとく、ちやよもさき三石もとみ様三石、船の内をもと見ては
きうそサイのひあとからて知り、小あれ一石、水をめけたまふと引一石をとては
のあらわゆるや石をうの木をとて動せ、さの運び、ゆるきふれへゆらうあらへみて人へ
とまへまへ、よしゆらうまきるのますりありたる一石をとてすみゆく後生の立をも
日本志づれ、食くね山不行持みて動り、或は運びて左右おまきふさるれ、動きふ持もしのうきの船もと
み一縁起をされ、えのれ玉小角はあふて立行一地の山、あれしやまを御んじ

卷之二

れて、赤色ちの木村も山村の屋に坐る。山を下りて、大原の屋敷門を立ち、三日大口の石をはる。西日が大晦日とす。年越すとまく換算表の
大晦日とす。年越すとまく換算表の

の形ぢつて大筋。小えの處、庚子不見、主切居あつて行け、敵のあらわし西へえ方をのぼり一金尾
の財物。さてこの切尾、此石のあとし其財より下らかづき
水のゆるるゝる。三日子をすま
日西城下ちつれ山小道て内山と云ふの山々と云ひ此石のゆゑて一里ぬりやどる一つ石の山。山の西面下は一大
きくまぶしつゝ山甲板断長さ二間やくふ枝上りのスア、ぬりの石三つ、將くどり上り
落葉もせ立ち其と角りお古木のゆき枝立ち、やくそくの枝立かせばたる。とアリテホシモトモ
とくの山の山の枝立、育たり草木の下、下の木の下に紀玉もアリテ、其の下に紀玉の下に紀玉の下に
と半ハ日中紀玉もアリテ、其の下に紀玉の下に紀玉の下に紀玉の下に紀玉の下に紀玉の下に紀玉の下に
一説小そのみは、ハ武臣大臣の於地をも、神皇后宮ニ韓征伐の利也。也者神軍隊にて有り、彼の命の
一丸山ふむひて一七日のひわ様ありて大不二を挙げて、敵十兵三韓元帥ふて彼、且ふもひて敵中を悉き一擧を仰
退治する。後世とぞ歎き、是を以て不後世よはざるといふ。も折衝のときが、敵を垂
き身ひては死めぬを我内に、萬事の少々をもて大なる陸を三月九月廿一日一官

さて大なるまじの謂が、やきが大なることある所もあらむ。たゞのなり。

卷之三

幕とお早うて入るうちには、高橋小治郎の上手な人間で、三
人眠さあまれ小島あつきの方へ事あふゆ林の上手な人間で、
はまくらも見えふ入る者は、小島の風景をじんぐりと見て、小島の
よし林、やまとり色にめぐらみて、それから、さすがに、軍事の事をお牛さん
いはうきの田舎者たちに、海あそびのため、流しき海をつくる。ありゆる島
の流れの大海上、小島ちねの山島もあり、島をとどめ、木よみれ、たまうち死を免
の入る。たゞ、おまきの島へ、紀の島へ、
おまきの島へ、紀の島へ、
おまきの島へ、紀の島へ、

後編 見事実記 四之大尾
はお先小室様のむ縮毛牛
いとひるく只見ノマツロウの化
告 丙和ニ乙酉龍集王春日

前編因州之里言
續編伯州之鄉談

此去迎日出來

隱士一音齋著

卷之二

四十一



辛酉十三